基礎研レター

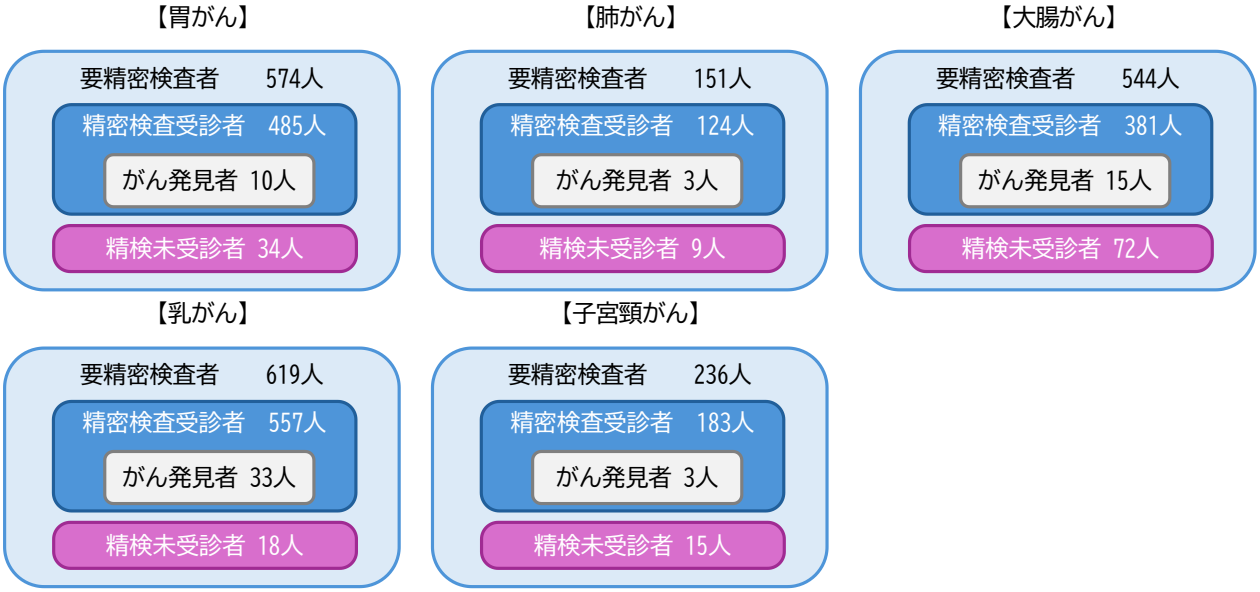
がん検診で「要精密検査」でも受診しない理由

保険研究部 主任研究員　村松 容子
e-mail: yoko@nli-research.co.jp

1――はじめに

国は、一定年齢以上になると定期的にがん検診を受けることを推奨している。「がん検診で「要精密検査」は何%？[1]」では、厚生労働省による「地域保健・健康増進事業報告の概況」から、これらの住民検診において、要精密検査となった人がどの程度いて、その中から実際にがんが見つかった割合がどの程度かについて紹介した。

図表１　“住民検診”におけるがん発見状況（それぞれ、がん検診受診者を 10,000 人とした場合）



（出典）厚生労働省「令和４年度地域保健・健康増進事業報告の概況」令和３年度がん検診受診者における要精密検査の受診状況より筆者作成（小数点以下四捨五入）
（注）　職域検診や人間ドック、症状がある人の検診結果は含まれない

[1] 村松容子「がん検診で「要精密検査」は何%？」ニッセイ基礎研究所 基礎研レター（2025 年 2 月 12 日）
https://www.nli-research.co.jp/files/topics/81106_ext_18_0.pdf?site=nli

Copyright ©2025 NLI Research Institute All rights reserved

2021 年度の地域がん検診では、「要精密検査」と言われた人のうち、胃がん 84%、大腸がん 82%、肺がん 70%、乳がん 90%、子宮頸がん 78%が精密検査を受けていた。しかし、精密検査を受けていない精検未受診者も、胃がん 5.9%、大腸がん 6.0%、肺がん 13.3%、乳がん 2.9%、子宮頸がん 6.5%と、少なくない[2]（図表 1）。精密検査を受けた人の 1.0～5.5%程度にがんが見つかっていることから、「要精密検査」のまま精密検査を受けないことで、がん検診を受けたにもかかわらず、早期発見の機会を逃しかねない。

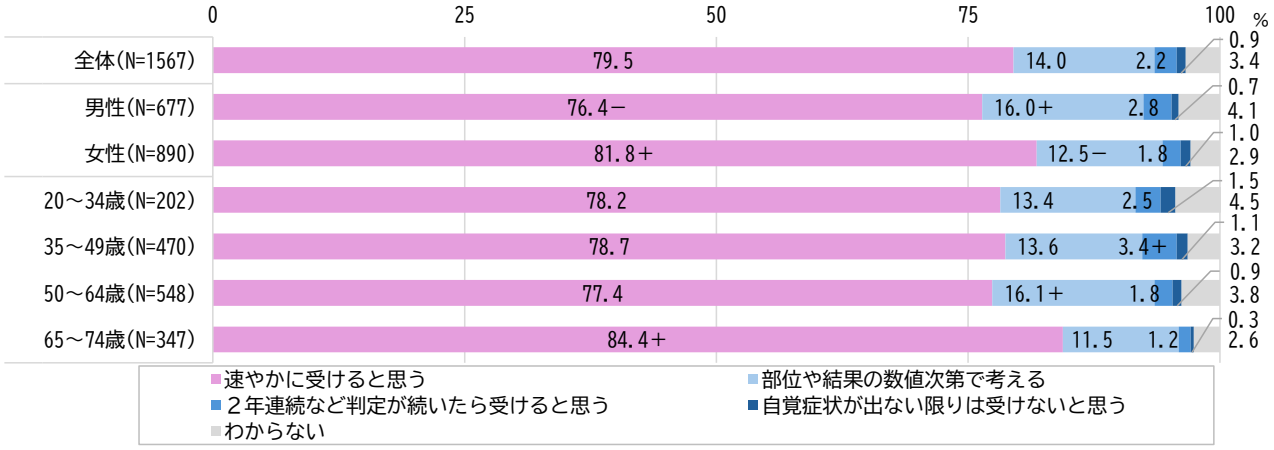
そこで、本稿では、2021 年にニッセイ基礎研究所が実施した「がんの備えに対する意識調査」から、精密検査未受診者の状況を紹介する。

2――要精密検査受診状況

1｜仮に「要精密検査」の判定が出た場合、速やかに精密検査を受けると思うか

まず、国が推奨する 5 つのがん検診のいずれか 1 つでも、最近 2 年以内に受けた人に対して、「仮に、「要精密検査」の判定が出た場合、速やかに精密検査を受けると思うか」を尋ねたところ、「速やかに受けると思う」が 79.5%、「部位や結果の数値次第で考える」が 14.0%、「2 年連続など判定が続いたら受けると思う。」が 2.2%、「自覚症状が出ない限りは受けないと思う」が 0.9%、「わからない」が 3.4%だった。「速やかに受けると思う」は、性別では、男性より女性、年齢群別では、65～74 歳で高かった。

図表 2　仮に「要精密検査」の判定が出た場合、速やかに精密検査を受けると思うか



（注）全体と差がある数値に±（5%有意）
（出典）ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査（2021 年）」

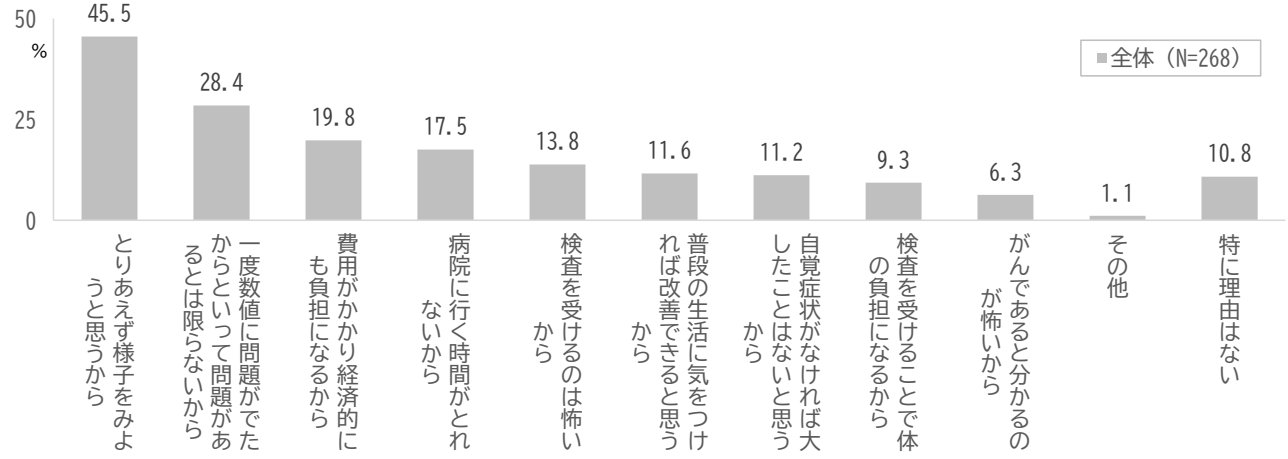
「わからない」を除く「部位や結果の数値次第で考える」「2 年連続など判定が続いたら受けると思う」「自覚症状が出ない限りは受けないと思う」と回答した人に、要精密検査判定時に速やかに精

[2] 精検未受診者のほかに、それぞれの自治体が精密検査を受けたかどうか未把握である受診者がいる。

Copyright ©2025 NLI Research Institute All rights reserved

密検査を受けない理由を尋ねると、「とりあえず様子をみようと思うから」が 42.5%でもっとも高く、次いで「一度数値に問題がでたからといって問題があるとは限らない（28.4%）」「費用がかかり経済的にも負担になる（19.8%）」「病院に行く時間がとれないから（17.5%）」が続いた（図表 3）。

図表 3　精密検査を速やかに受けない理由



（出典）ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査（2021 年）」

一般に、がん検診を受けない理由として、「心配なときはいつでも医療機関を受診できるから」「費用がかかり経済的にも負担になるから」「受ける時間がないから」「健康状態に自信があり、必要性を感じないから」等があげられ、がん検診を重視していなかったり、時間や経済的な負担を避けていることが知られている[3]。それに対し、今回の分析対象者は、2 年以内にがん検診を受けていることから、がん検診の必要性を一定程度認識していると思われるが、やはり費用や時間の負担を避けたり、健康状態に自信を持っていたり、がんが見つかる不安等から再検査を躊躇する様子がうかがえた。

2｜「要精密検査」の判定を受けた経験がある人は、判定後どの程度で精密検査を受けたか

続いて、これまでに「要精密検査」の判定を受けたことがある人に、精密検査受診経験を尋ねた。その結果、「指摘されてすぐに検査をした」は、最も高い乳がんで 80%、最も低い胃がんでは 66%と部位によって差があったが、「3 か月以内に検査をした」を合わせると 85～90%程度が、「半年以内に検査した」も合わせると、95%程度が、検査をしていた。図表 2 と比べると、精密検査を受けた人は多くなっていた。

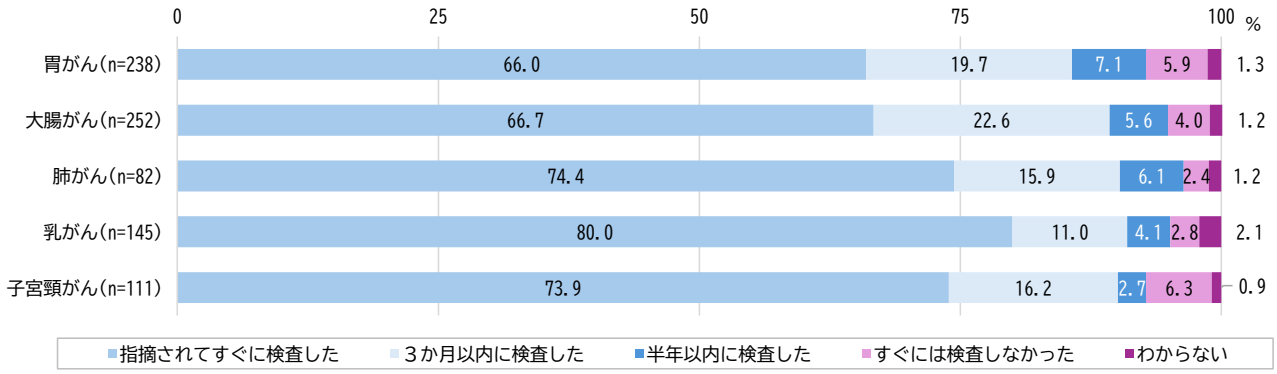
要精密検査の判定を受けた年齢は尋ねていないため不明であるが、比較的罹患年齢が高い肺がんと、乳がん、子宮頸がんで「指摘されてすぐに検査をした」と回答した割合は高くなっており、図表 2 の高年齢層や女性で「速やかに受けると思う」の割合の高さと整合的だった。子宮頸がんでは、

[3] 内閣府「がん対策に関する世論調査（令和 5 年 7 月調査）」等。
（https://survey.gov-online.go.jp/r05/r05-gantaisaku/2.html、2025 年 2 月 19 日アクセス）

Copyright ©2025 NLI Research Institute All rights reserved

「すぐには検査しなかった」が５つの部位でもっとも高く、精密検査をすぐに受けた人とすぐには受けなかった人とに分かれたようだ。また、胃がんは、５つの部位でもっとも「すぐに検査した」の割合が低かった。

図表４ 「要精密検査」の判定後の検査受診状況



（出典）ニッセイ基礎研究所「がんの備えに対する意識調査（2021 年）」

3――フォローアップのタイミングと方法

がん検診は国も推奨するところであるが、時間や経済的な負担を嫌がったり、がん検診の必要性を認識していないことから、受診率が伸び悩んでいることが知られている。しかし、今回見てきたとおり、がん検診を受けたとしても、精密検査を勧められた場合に、すぐに精密検査を受けるとは限らず、自分自身の健康状態に自信を持っていたり、がんが見つかる不安から躊躇する様子がうかがえた。一方、実際に、「要精密検査」の判定を受けた人においては、今回の調査で 95%程度が精密検査を受けており、仮に要精密検査だった場合の精検受診意向と比べると、精検を受けている可能性があった。

現在、国が推奨するがん検診は、スクリーニング検査であり、無症状の人を対象に、がんの疑いがある人を発見するものである。すなわち、がん検診を受けるときは、多くの人が、自分ががんである可能性を意識せずに受けており、要精密検査の判定を受けた場合についてまで想像が及んでいないと考えられる。

がん検診を推奨するときには、検査結果がいつごろ返ってきて、要精密検査の判定が出る割合はどの程度で、その場合はいつ頃、どうしたらいいのかについても周知しておくことで、必要があればスムーズに精密検査に進めるよう環境を整えていくことが重要だろう。

本資料記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と完全性を保証するものではありません。
また、本資料は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。